

## 『古事記』と『日本書紀』から見た国家と地方豪族

著者	サハロヴァ エヴゲーニヤ
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	国立ロシア人文大学，モスクワ大学，2007年10月31日-11月2日
ページ	149-155
発行年	2009-12-15
シリーズ	ロシア・シンポジウム 2007 International Symposium in Russia 2007
図書名	日本文化の解釈：ロシアと日本からの視点
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00001349">http://doi.org/10.15055/00001349</a>

# 『古事記』と『日本書紀』から見た国家と地方豪族

エヴゲーニヤ・サハロヴァ

ロシア国立人文学大学

日本の史学の歴史において『古事記』及び『日本書紀』における氏族の構成を対比する研究は数多くなされてきたが、管見によれば、それらはいずれも系譜に関する情報しか考慮に入れていなかった。日本の研究者・溝口睦子氏の計算によれば、『古事記』では始祖が挙げられている氏族の数は203であるのに対し、『日本書紀』ではそのような氏族はわずか93に過ぎない。両者の違いは、血統の類別に関しても存在する。『古事記』では80%以上の氏族が『皇別』、すなわち古代の天皇にさかのぼる血統に分類されるのに対し、『日本書紀』ではそのような氏族は既に53%のみで、47%の氏族は『神別』、すなわち神々を始祖とする血統に属している<sup>1</sup>。さらにもう一つの違いは、『古事記』に見られる氏族の地理的範囲が『日本書紀』よりもはるかに広いことである。『古事記』における地理的範囲の方が広い理由は、次のように説明されている。すなわち『古事記』にはより早い国家体制の段階、つまり中央と地方豪族の直接交渉の確立がとりわけ特徴的であった段階が反映されているのに対し、『日本書紀』の時代には媒介者（中央から派遣された官吏）が出現して、形成されつつあった国家機関の上層部を占めていた地方豪族の役割と比重が減少したのである（表1）。

表1.

合計	神別		皇別	氏族類別	
	地祇	天神・天孫			
193	8	27	158	氏数	古事記
100	4	13.6	82	%	
76	10	26	40	氏数	日本書紀
100	13	34	53	%	
692	24	388	280	氏数	姓氏録
100	3.5	56	40.5	%	

出典：溝口睦子『日本古代氏族系譜の成立』学習院学術研究叢書9（1982）124頁。

筆者は『古事記』と『日本書紀』に反映されている中央と地方の相互関係のシステムに強い関心を持っているので、地方豪族の対比分析を行うために、系譜に関する情報だけでなく全般的な、氏族に関するあらゆる言及を考慮に入れた自分なりの数量分析を行ってみたい。

本論の主な目的は、次の通りである。

まず、『古事記』及び『日本書紀』に見られる地方豪族の構成に関して対比分析を行う。

次に、形成されつつあった国家行政機関の構造に地方豪族を統合する主要な原則が変化したかどうか、もし変化したならば主としてどのような違いが生じたかを明らかにすることを試みる。

さらに、『古事記』及び『日本書紀』に見られる地方豪族の地理的範囲を調査する。

## 分析

『日本書紀』に記載されている全般的な数について見ていくことにする。

『古事記』に言及されている242の氏族のうち、80%以上は初出の際<sup>2</sup>その氏族についての系譜に関する情報が引用され、11%が皇族との婚姻、5%が国家の職務の遂行に関連して言及されている。

『日本書紀』に言及されている氏族の数は466だが、その60%以上は天皇に何らかの奉仕をする状況で言及され、氏族についての系譜に関する情報が引用されているのはわずか21%であった。

## 地方氏族

残念ながら、両者に登場する氏族の全ての地理的つながりが判明している訳ではないため、断片的なデータを用いざるを得なかった。すなわち、出身地が分かっている氏族のみを計算に入れた。さらに、畿内地方豪族を除いておいた。

『古事記』における120の氏族（つまり、同書で言及される氏族の総数のほぼ50%）は、多かれ少なかれ地方豪族に分類することができよう。『日本書紀』では、そのような氏族は118、つまり氏族の総数の25%である。

以下、その地方豪族に関する情報の分析に入りたい。

## 地方氏族が言及される一般的な文脈

氏族の類別に関して言えば、『古事記』では、90%以上の地方氏族がその氏族についての系譜に関する情報を伝える目的で言及され、次のグループ（約6.7%）が皇族との婚姻に関連して言及されている。『日本書紀』では状況は異なっている。43%の氏族が国家の職務の遂行に関連して言及され、39%の地方氏族が最初に言及された時は、氏族の系譜に関する情報を伝えるのが目的であった（他の18%は暫定的に「その他」の分類に入れることにする）。

全体として『古事記』及び『日本書紀』に言及される地方氏族の総数はほぼ同じ（それぞれ120及び118）であるが、『日本書紀』において地方氏族が言及される割合は『古事記』に比べて二分の一に減少していた。『日本書紀』では、地方氏族は系譜の究明に関連して言及されることよりも、国家の職務の遂行に関連して言及される方が数において勝っている。

従って、氏族が最初に言及される時期の分布状況も異なっている。『古事記』では神代から応神天皇の治世までの時代に言及されており、応神天皇の治世以後に新しく言及されることはほとんどない。『日本書紀』では持統天皇の治世に至るまで、すなわち本歴史書の全ての期間にわたって新しい氏族の言及がかなり多く見られる（図1-2）。

『古事記』においては、地方氏族の79%（95氏族）が『皇別』の血統に類別され、『神別』の分類に属するのは14%のみである。『諸蕃』の分類はわずか一つの氏族しかない。『日本書紀』では、残念ながら地方氏族の36.4%は血統が不明である。それ以外の氏族の血統の割合は、『古事記』とあまり違いはない。78%が『皇別』、16%が『神別』、5.3%が『諸蕃』である（表2-4）。全体として、大多数の地方豪族の氏族は『皇別』の血統であるという特徴が見られた。溝口睦子氏は、『神別』の血統に属する氏族の割合が増加したと指摘したが、それは部分的には、

『古事記』に比べて『日本書紀』においては地方氏族の比重が縮小されたことによって説明される。まさに同じ理由で、『日本書紀』における氏族の血統の割合は、『新撰姓氏録』の割合に近くなっている。『日本書紀』でも畿内の氏族の数は多いが、『新撰姓氏録』で記載されているのはもっぱら畿内の氏族の情報のみである(表1)。

表 2. 『古事記』における血統の類別

血統の類別	氏数	%
皇別	95	79.2%
神別	17	14.2%
諸蕃	1	0.8%
不明	7	5.8%
合計	120	100%

表 3. 『日本書紀』における血統の類別

血統の類別	氏数	%
皇別	59	50%
神別	12	10.2%
諸蕃	4	3.4%
不明	43	36.4%
合計	118	100%

表4. 『日本書紀』における血統の類別(不明の氏族を除く)

血統の類別	氏数	%
皇別	59	78.7%
神別	12	16%
諸蕃	4	5.3%
合計	75	100%

ここで碑銘学の資料(稲荷山古墳や江田船山古墳の鉄剣、隅田八幡宮の鏡、稲荷台-1古墳の鉄剣の銘文)を想起することは適切であろう。有名な稲荷山古墳の鉄剣の銘文には、乎獲居臣(おわけおみ)の祖先が列挙されている。つまりその系譜の情報、及び持ち主がどの天皇にお仕えしてこの鉄剣を賜ったのかが記されているのである。この鉄剣は471年のものとされており、従って、系譜の始まりは5世紀以前の時期と認められる。銘文には恐らく、権力を有する氏族(天皇の一族)との親縁関係の確立について記述されているものと思われる。第一に、臣という姓はほぼ常に、皇族を祖先とする氏族が有していたからである。第二に、溝口睦子氏の研究によれば、銘文に挙げられている最初のおわけのおみの祖先はおホヒコであるが、それはより後の時代でおホ-ヒコ-ノ ミコト(大彦命)として系譜に言及される名前の略称であろうと考えられる。おホ-ヒコ-ノ ミコト(大彦命)は孝元天皇(紀元前214-158年と伝えられる)の皇子であった。系譜は、中央と地方の間の政治的関係を安定化させる強力な手段であったと見られる。注目したい点は、4世紀に前方後円墳が出雲、関東、吉備といった古墳建設の最も大規模な中心地で1-2世代の内

に造られていたとすれば、その後時間的間隔を経て、5世紀からは既に地方で前方後円墳が4-5世代の間に造られるようになったことである<sup>3</sup>。

### 一致／不一致の場合

今度は、『古事記』及び『日本書紀』で言及される地方氏族の構成を比較してみよう。44の氏族が、『古事記』と『日本書紀』の両方に言及されている。つまり、地方氏族の構成のほぼ37%が一致している。『古事記』においてその44の氏族は36.7%を占め、『日本書紀』と一致しない氏族は76あり、63.3%を占めている。『日本書紀』では、一致する44の氏族は37.3%を占め、『古事記』と一致しない氏族は74あり、62.7%を占めている。

### 一致する場合、氏族の地理的範囲

その44の氏族の地理的範囲に関しても、近江国が最も多く、九州の北部と東部、吉備国、及び関東でも目立っている（図3）。『古事記』と『日本書紀』に言及される地方豪族の多くが、郡レベルの地方豪族に属していた。少なくとも10の氏族に関しては、より後期の資料（『新撰姓氏録』、『国造本紀』、『万葉集』、木簡、正倉院文書）から、8世紀には氏族の人々が郡レベルの地方豪族に属し、郡領の地位に就いていたことが確かに分かっている。その上、44の氏族全てに関する言及が、より後期の資料に認められる。

### 一致しない部分

地理的には、『古事記』か『日本書紀』のいずれか一方にしか言及がない地方氏族は、両方に言及される氏族とほぼ同じように分布している（図4、5）。つまり、地理的な優先順位ではなく、中央の支援を享受した氏族の構成が変化したのである。

『日本書紀』には言及されても『古事記』には言及されない地方氏族の大部分は、孝徳、斉明、天智、天武、持統天皇の治世に該当する（74氏族のうち24氏族で、32.4%）。すなわち、『古事記』には記述のない、改革の時期に当たる。『古事記』のみに言及があり、『日本書紀』や他のより後期の資料には言及されない氏族は38.2%（29氏族）に過ぎないことは指摘する必要がある。『日本書紀』ではこの数字はかなり高く、55.4%である（41氏族が他の資料に言及されない）。このように、『古事記』は『日本書紀』と違って古代及び中世の時代には必要性の高い書物とは見なされていなかったにもかかわらず、『古事記』に言及された地方氏族は、結果的に国家統治システムにおいてより安定した地位を占めていたということになる。そしてこの安定性を保証したのは、系譜の、世襲の原理であった。それは、地方豪族を国家統治システムに統合する主要な手段であった。

### 結論

1. 『日本書紀』において畿内以外を出身地とする地方豪族の割合は、『古事記』に比べて二分の一に減少した（それぞれ25%及び50%）。
2. 『古事記』では、地方氏族はほぼもっぱら系譜に関する情報を伝える目的で言及されていた（言及の90%以上）。『日本書紀』では地方氏族の43%が国家の職務

の遂行との関連で言及され、系譜に関する情報を伝える目的で言及されたのはわずか39%に過ぎない。

3. 『古事記』と『日本書紀』のいずれにおいても、大多数の地方氏族が『皇別』の血統、つまりほぼ全ての地方氏族が皇族を始祖とするという特徴が見られた。

4. 『古事記』及び『日本書紀』における地方氏族の構成は、37%が一致していた。歴史的に見て、『古事記』に言及された地方氏族の地位はより安定していたと見受けられた。このことは、8世紀後半に、譜代郡司の任命が成功したことに関係している。

5. 国家にとっての地理的な優先順位は、高度に安定していたという特徴が見られた。『古事記』と『日本書紀』のいずれにおいても、最も多く言及されたのは近江国、そして九州の北部と東部、吉備国、関東の地方豪族であった<sup>4</sup>。

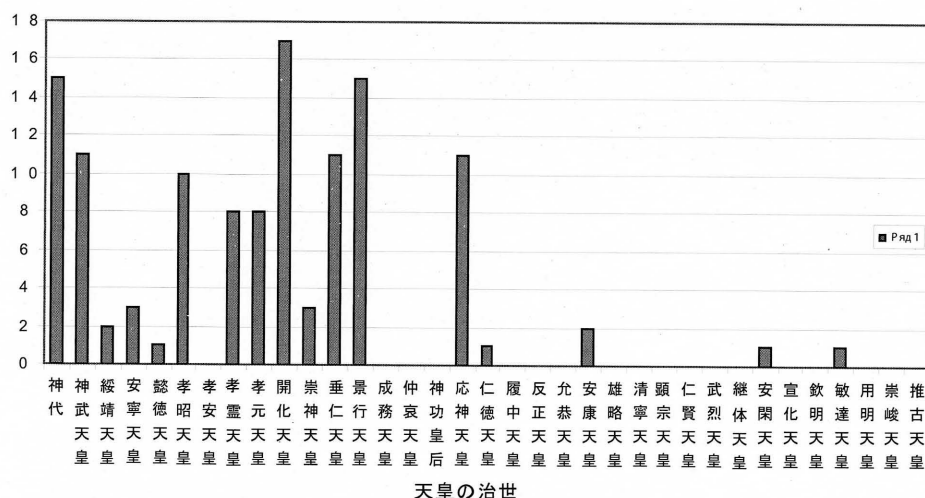


図1. 治世順に見た地方豪族の初出時期（『古事記』）

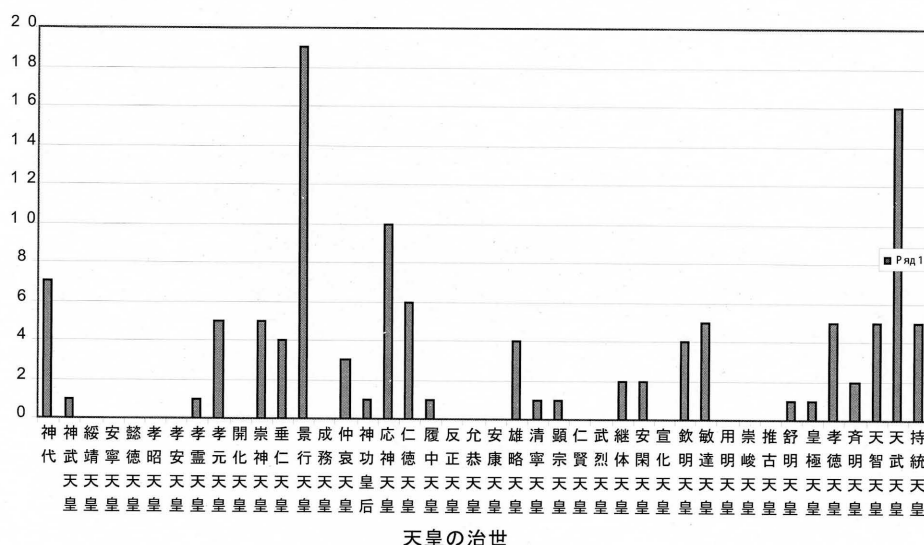


図2. 治世順に見た地方豪族の初出時期（『日本書紀』）



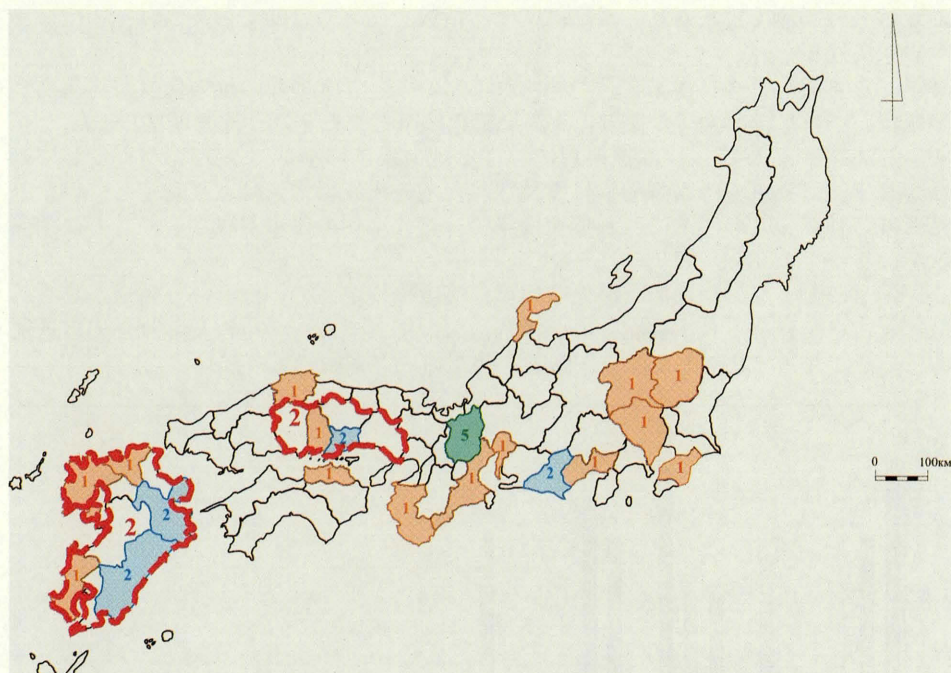


図3.『古事記』と『日本書紀』のいずれにも記載がある地方氏族の数（国別）<sup>5</sup>

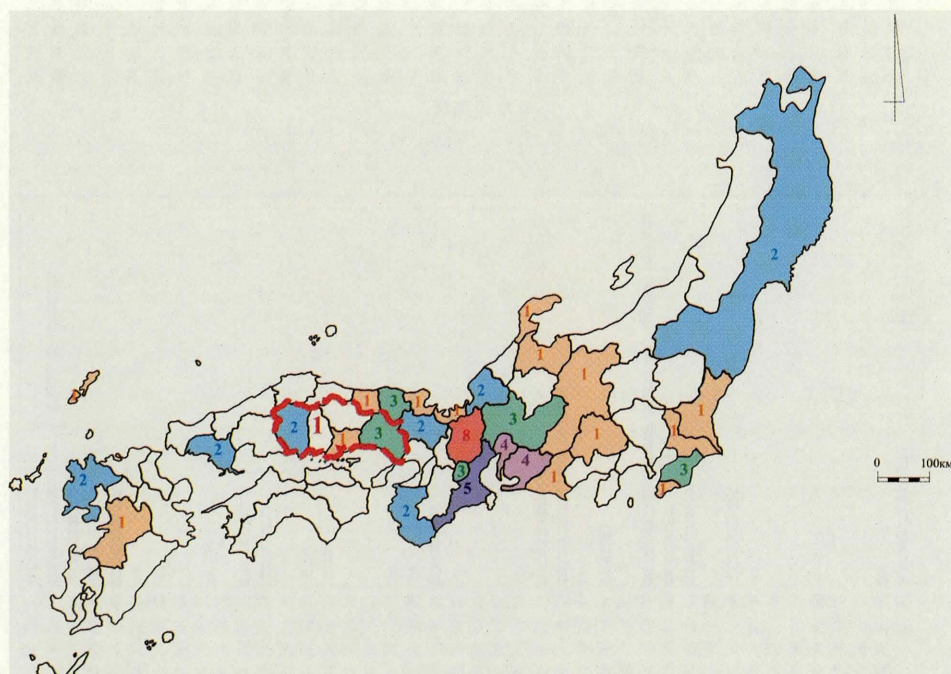


図4.『古事記』には記載されるが、『日本書紀』には記載がない地方氏族の数（国別）

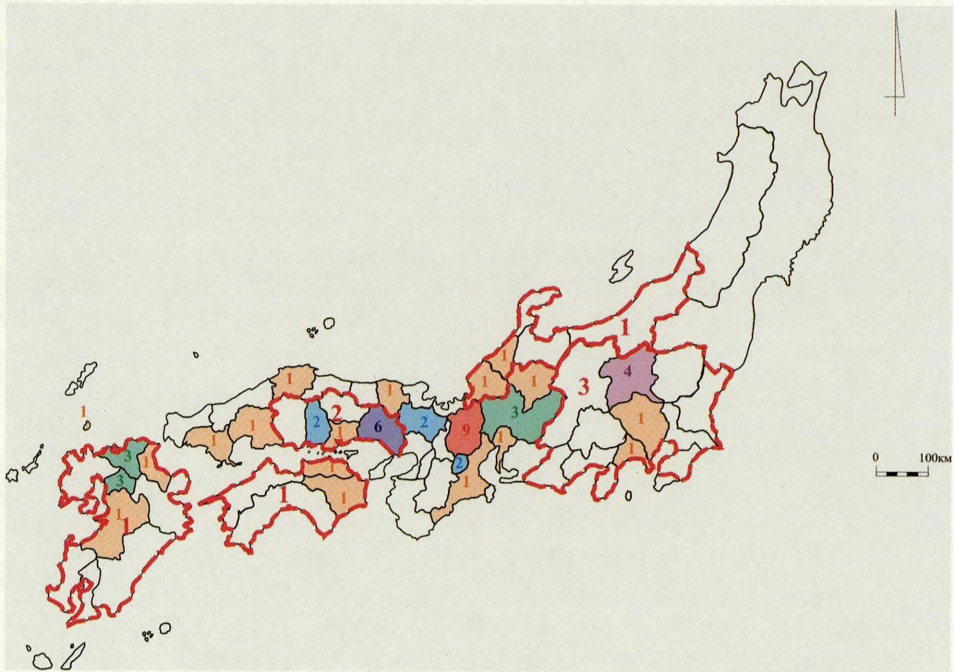


図5.『日本書紀』には記載されるが、『古事記』には記載がない地方氏族の数（国別）

## 注

- 1 溝口睦子『日本古代氏族系譜の成立』学習院学術研究叢書9（1982）120-126頁。
- 2 特に『日本書紀』に特徴的なことであるが、いくつかの氏族は一度ならず言及されるため、本論では両史書において最初に言及される文脈のみを考察の対象とする。
- 3 朝尾直弘他編『岩波講座 日本通史』古代1、岩波書店、1993、49-52頁。
- 4 論文のロシア語の草稿から日本語に訳出する際、土田久美子氏（ロシア国立人文大学非常勤講師）の協力を得た。
- 5 図表3から5における赤い点線は氏族の出身地が国単位ではなく、地方の名前で記載されていることを意味する。例えば、吉備、九州、関東、越等である。